

留学生の日本文化理解を促進するための俳句学習と制作 —日本語表現の能力向上のための実践例—

Learning and creating Haiku, in order to promote the understanding
of foreign students for Japanese culture
— example to enhance Japanese language capability —

池間 里代子¹⁾

Riyoko IKEMA

北原 俊一²⁾

Shunichi KITAHARA

石野 榮一¹⁾

Eiichi ISHINO

大西 正行²⁾

Masayuki ONISHI

小笠原 典子¹⁾

Noriko OGASAWARA

はじめに

平成26年度、本学メディアコミュニケーション学科ゼミ（留学生対象）と十文字学総合ゼミD（留学生・日本人学生対象）では、昨年度に引き続き合同で「国際目線でWEBマガジン制作」をコンセプトに取材・執筆・構成を行なっている。

今年度はゼミの目標である「日本の四季の生活ニュース」をより身近に体験してもらうことと、日本語のレベルアップを期待して俳句学習と制作を試みた。本稿はWEBマガジン制作そのものよりも俳句学習と制作による実践を中心に取り上げる。

俳句学習は従来小学校などにおいて教材としてよく取り上げられており、古今の名作を鑑賞し、俳句作りを試みた研究報告は比較的多く目にする。今回は、日本語が外国語である留学生にとって俳句というリズムになじみが生まれるのか、季語の理解が可能なのかを検証し、俳句指導によって日本語能力の向上が見られたのかを報告する。

俳句指導は主として石野榮一、添削は小笠原典子・池間里代子、全体構成を大西正行が担当した。また、昨年度同様WEB技術指導を北原俊一に、コンテンツ制作の支援を本学メディア産業研究所研究員でDTPデザイナーである安井智弘氏にお願いした。

¹⁾ 十文字学園女子大学21世紀教育創生部

Division for Arts and Sciences, Jumonji University

²⁾ 十文字学園女子大学人間生活学部メディアコミュニケーション学科

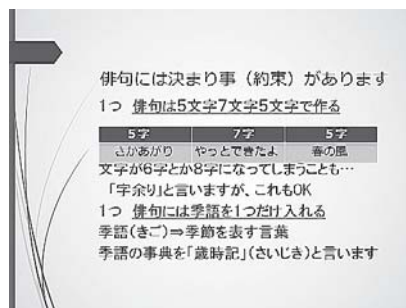
Department of Media Communication Studies, Faculty of Human Life, Jumonji University

キーワード：俳句、WEBマガジン、取材、作品、表現文化大賞

1. 俳句という教材

本年度の教材を俳句に定めた理由は以下である。

- ・世界最短と言われる定型詩であることから、作りやすいのではないかな。
- ・季語を入れる約束があるので、日本の四季を意識できるのではないかな。
- ・文語表現を使うこともあるので、日本語のレベルアップが見込まれるのではないかな。



写真①：石野榮一作成

以上のことから、俳句を学び制作することを通じて、留学生の日本語力を伸ばそうと考えた。まず、導入として俳句の決まりについて学んだ。

写真①のように五七五の文字制限があること、季語を入れることを学んだ。

次に、著名な俳句を「KUMON俳句カード春・夏・秋・冬」で鑑賞した。くもん式の俳句カードを採用した理由は、実際にこの教材を用いて俳句を学んだ経験のある教員（池間）の当時2歳の娘が非常に興味を持ち、50句ほどを暗唱したことがある体験に基づき、日本語を学んで数年の留学生にも適当ではないかと判断したからである。カードは各巻30句を収録しており、表面は関連イラストと初めの5文字を入れ、暗唱にも適している。まずは難しいことを考えずに五七五のリズムに慣れ、面白いと感じてもらうことから始めた。

2. 制作の過程

俳句は想像によって作ることも可能だが、多くは取材（^{ぎんこう}吟行）による方が作りやすいと考えられている。そこで、第1回目は2014年4月、十文字学園女子大学構内で満開の八重桜を題材にした。2回目は5月に「横浜・鎌倉取材バス旅行」と銘打って、学外取材を行なった。3回目は梅雨について、4回目は七夕をテーマに制作を行なった。以下に「八重桜」「横浜・鎌倉」「梅雨」「七夕」の実践を記す。

なお、引用作文（添削済み）・俳句の作者は順不同である。

2.1 「八重桜」

取材日は4月16日、校内2号館脇に咲く八重桜を見に行った。この日はゼミの開講初日だった。桜は満開で時折吹く強風にちらほらと花びらが舞うという状況。留学生は桜のみならずザンポポやスマイレも見つけて写真を撮るなどした。

ゼミ室に戻ってまず200字程度の作文を書いてもらった。そのあと俳句を制作した。

a. 今日の授業では八重桜を見に校庭へ行きました。四月の後半だから、普通の桜は散っていましたが。でも八重桜が咲いています。八重桜の花は普通の桜より大きくて、花卉が多くて、重い感じがします。八重桜の色は薄いピンクや濃いピンクの二つ種類あります。今年は花見に行

きませんでした。今日のような機会に綺麗な桜をみられて、気持ちがよくなりました。ストレスも解消しました。

「八重桜　ピンクや白で　面白い」

b. 今日の授業では、みなさんと一緒に学校での八重桜を見に行った。普通の桜と違って、この時期にちょうど満開になったのだ。みなさん写真を撮るのに忙しいとき、突然風が吹いてきて、あたかもピンクの雪のように、花びらが散った。ゼミ生全員は楽しそうだった。「日本の春は本当にいいシーズンだなあ」と心に深く感じている。こんな美しい環境に気持ちよくならずにはいられないだろう。とにかく、今日はとても楽しかった。

「八重桜　はらはら舞い散り　夢みたい」

c. 今、みんなと八重桜がたくさん咲いているところを見してきました。ピンクと白の色があり、ボタンみたいでとてもかわいいです。木の下にタンポポがありました。まだ黄色が咲いていますが、あと一週間くらいで白くなるそうです。いろいろな植物があって、春の雰囲気にもまれていて、気持ちがとてもいいです。それでいっぱい写真を撮っていただいて、楽しく過ごしました。この授業を取る前は桜の種類が一つだけだと思っていました。この授業でこれから知らない日本文化を勉強できることを楽しみにしています。

「八重桜　乙女のような　美しさ」

d. 八重桜と普通の桜は全然違う感じです。でも、春になって、どんな花でも自分の一番の美しさを示しています。たぶん、植物の美しさはそれ自身だけじゃなく、春を感じる人の心も豊かにします。私はどんな季節も好きですが、やっぱり春が一番生命力がある季節だと思います。花海のような日本で桜を見たことは、一生忘れられない思い出に残る春だと思います。

「八重桜　青春みたい　輝いた」

bさんの作品は当初「はらはら落ちり」だったが、「はらはら」を生かして「はらはら舞い落ち」とした。字余りだが、本人も納得した。また、「八重桜（やえざくら）」は5文字かつ季語であることから、比較的作りやすかったと思われる。試作段階でも「気持ちを入れましょう」と助言したのみで、自立して制作できた。aさんは「(色の) 白」と「面白い」の白とを掛けたユニークな作品を作ったが、逆に俳諧の「軽み」が表現できていると思う。

cさんdさんの「乙女のような　美しさ」「青春みたい　輝いた」は直喩であり技巧的ではないが、自分の感性を表現できたと思う。

最後に、WEBマガジン作成の中で、写真を選びキャプションを付けるという作業がある。今回留学生が選んだのが写真②である。付けられたキャプションは「天国のような美しい小道」であった。昨年度の留学生が「情熱的な桜」だっ



写真②：「天国のような美しい小道」

たことを振り返ると、年度によって同じ桜の写真を選びキャプションを付けるにしても感性が異なることが分かった。

2.2 「横浜・鎌倉」

5月11日、チャーターバスにて横浜の日本新聞博物館・シーバス体験・鎌倉大仏・鶴岡八幡宮を見学した。メディア専攻の学生がほとんどであったため、日本新聞博物館の展示・体験に関心を持った様子だが、俳句制作には古都鎌倉が適していたようだ。

a. 印象が一番強かったのはやはり有名な鎌倉大仏でした。さすが古都鎌倉ならではのシンボルとあって、観光客でいっぱいでした。こんな大きい仏像は初めて見ました。20円で入ることできた仏像の胎内の壁のくぼみには、500円玉や100円玉や10円玉があちこちに置いてあり、観光客が自分と周囲の幸せを願っているように感じました。言うまでもなく、たくさん写真を撮りました。楽しみながら勉強になり、よかったと思います。

「薄暑来て 大仏そびえ 古都らしく」

b. 横浜の海を見たたん、みんな、ウキウキした気分になりました。さっそく、先生が買った乗船券を持って、「海の旅」を始めました。船は飛ぶように進んで、潮風が頬をかすめ、海の波が体に飛び散って、はれはれした気分になります。遠くの高層建築や観覧車そして客船などが、きれいな海の波に互いに照り映えていて、自分の気持ちをおおらかにしてくれました。本当に忘れられない景色でした。

「災逃れ 今夏も坐する 大仏殿」

c. 今回ずっと気になっていたことは横浜でシーバスに乗ることだ。シーバス乗組員は私たちと何十メートルも離れているのに、挨拶のジェスチャーをしてくれた。そんな細かい所まで気がつくとは、びっくりした。先日学校の友人が山に登った時も、行ったり来たりする人から挨拶を受けたそう。なぜそうするのだろうか？ 大学に戻って先生から「顔見知りになれば、道に迷った時に探しやすいからね」という話を聞いた。日本の人はそういうところが面白いと思った。

「夏朝日 きらきら揺れる 国旗だよ」

d. バスで横浜に着いた後、シーバスに乗って、山下公園を散歩しました。そこでマリンタワーを見ました。それは50年以上の歴史があるそうです。また日本新聞博物館を見学しました。笹本恒子さんという100歳の報道写真家の足跡を見て、感動しました。博物館の中は昔の日本に戻ったようで、歴史の魅力はすごいと思いました。

そのあとは鎌倉でごはんを食べて、鎌倉大仏を見学しました。友達と大仏の胎内に入った後、日本の硬貨がいっぱい置いてあったので、私も10円玉一枚をそこに置きました。日本の地に自分の足跡を残した感じでした。一日いろいろな所に行って、最後は疲れましたが、楽しかったです。

「一生を カメラに捧げ 煌めいた」

bさんは当初「そびえ立つ 風雨恐れず 常仏だ」「災にあう 旧態依然 常仏だ」という

作品を作っていたが、季語が入っていないことから「今夏」を入れ、「災にあう」を「災逃れ」に視点を変えた。実際には鎌倉大仏は津波によって建物が流されてしまったのだが、そこを敢えて「大仏そのものは流れずにそこに居る」と解釈した。

cさんは「夏の波 きらきら揺れる 国旗だよ」としたが、中句が「夏の波」「国旗」両方に掛かっており焦点がぼやけるので「夏朝日」に換え、イメージをしっかりと定着させた。

dさんの句には季語がないが、「100歳の報道写真家の足跡を見て」という詞書があれば成立するとみなし、そのまま手を入れずに掲載した。

第1回目の「八重桜」に比べると、自分が感動したシーンをうまく五七五にまとめる力が付いたと評価できる。

aさんの作品については後述する。

2.3 「梅雨」

6月の授業では、「梅雨」をテーマに取り上げた。雨が多い季節であり留学生が関心を持ちやすいこと、日本の生活や文化を理解する格好の教材だと判断したからである。

留学生の多くは中国出身で、広い国土を反映してか、出身地により「梅雨」のニュアンスが違っていた。それを前提に、授業ではまず日本の梅雨について解説を試みた。「走り梅雨」「梅雨の晴れ間」「梅雨寒」「暴れ梅雨」「戻り梅雨」「空梅雨」といった、梅雨に関する表現が多岐にわたること、雨を喜ぶ人もいれば嫌がる人もいるなど、それぞれの表現は日本人の生活や文化と深く結びついていること伝えた。また、日本語の梅雨に関する表現と同様な表現が母国にあるかを考えさせることで、日本語の理解を一步深める工夫を行った。

梅雨についてディスカッションした後、2グループに分かれて学内を散策。テーマは「季節を見つける」としたが、アジサイの種類が複数あること発見したり、梅の実を見つけかじったりと季節を実感する場面が多く見られた。その後、「学内で見つけた梅雨（季節）」をテーマに作文と俳句づくりに取り組んだ。

以下に作品例を挙げる。

a. 「あじさいや そとにざあざあ 雨音響く」

b. 「梅雨空に 雨とお祝い 誕生日」

aさんは下の句が字余りだが、「あじさい」「ざあざあ」のように近似音でまとめ、季節感をよく表現できている。bさんは「梅雨空」「雨」が季語重なりだが、誕生日を雨と一緒に祝いする、という弾むような気持ちが表現できていると思う。

すでに「八重桜」「横浜・鎌倉」を題材に、作文・俳句の作成に取り組んでおり、今回の「梅

雨」に関する授業は前期の中間期にあたる。200字から400字程度で自分が経験した事柄を描写すること、感じた事柄を表現することについては、訂正箇所もあるものの、読み手に適切に伝わる文章が30分もかからずに書けるようになってきている。同時に俳句の作成も複数句完成できる学生も現れた。文章作成については、「身近な話題」ばかりでなく、「抽象的な問題」に関しても自分の意見を記し、読み手に適切に伝えるというトレーニングを行うことが次のステップだと考えられる。

さて、俳句作成に関しては授業で配布した「季語表」の助けを借りてはいるが、初めはただ普通に文章をつづっていた学生も、「梅雨」の授業まで回数が進むと、自分なりの理解で、俳句作成に取り組んでいる姿勢が見られるようになり、それなりの手ごたえを感じているように見られた。

2.4 「七夕」

本学では短期大学部を中心に七夕イベントが盛んである。7号館1階には大笹が設けられ、学生が色とりどりの短冊に願い事を書いて吊るす。留学生も「日本語がうまくなりますように」などと書いて吊るすしに行った。なお、日本では七夕といえば「文字上達」「針事上達」を願う意味が強いが、中国では年に一回の逢引という側面が強くaさんの作文にあるように「夏のバレンタインデー」といったとらえ方をしている。旧暦7月7日に当たる8月上旬（2014年は8月2日であった）には結婚式が多く、路上ではプレゼント用の花束が売られる。留学生の俳句にもその事情が反映していた。中国語訳を試みた作者については、これも付記した。

a. そろそろ七夕祭りが来ます。中国の七夕祭りはバレンタインデーのような節句の日です。今年は以前と違って、私は日本で交換留学生として過ごしているから、恋人と一年間会えなくなってしまう。七夕が近づくからこそ、彼のことが一層懐かしくなって、会いたい気持ちも一層強くなってしまいます。だから、この俳句を作って、会いたい気持ちを表すことにしました。

「七夕や 短冊結ぶ あなたとも」

「七夕节 同你携手 绑上心愿」

b. 「七夕」の物語は、いつも美しい感覚を恋人に与えます。でも、私には「七夕」の物語でも、節句でも、悲しいものです。恋人たちを離れさせるのは一番まずいことだと思います。織姫が織った織物がまるで女性の細く長い想いのようで、天の川のほとりでまるで二人の恋人が互いを懐かしんでいるかのように思えます。だから、織姫と彦星は自分を犠牲にして、「七夕」の日を作りました。私にはデートの日と言うより、愛を大切にしなければならないという警告の日に思えてなりません。

「織物が 織姫の思い 絡み付く」

「织物缠绕着织女长长的思念」

c. 七夕は中国では非常に幸せな日です。彦星と織姫の愛から七夕の物語が作られました。私も子供の頃おばあさんから二人の物語を聞きました。その日の夜、家族と一緒にお菓子を食べながら彦星と織姫の内緒話を聞いたそうです。今年は初めて日本で七夕を迎えました。以前か

ら日本の七夕は花火大会があり、浴衣を着た女の子が歩くという町の風景があると聞いています。とても楽しみにしています。

「七夕に 葡萄棚下 秘密聞く」

「七夕的晚上，在青翠的葡萄树下面，可以听到牛郎织女的悄悄话」

d. 梅雨空とともに七夕の日を迎えました。駅でも学校でも願い事を書いた短冊が笹に飾ってあります。学校では毎年、七夕パーティーをします。みんな浴衣を着て、話したり、お菓子を食べたりします。写真も撮ります。中国では七夕祭は旧暦で行います。男性と女性はデートをします。映画を見に行ったり、レストランで食事をしたりします。七夕は昔から伝統的な祭日です。今、日本の七夕は旧暦ではなく、新暦で祝います。日本人は願い事を短冊に書いて笹に結びます。

「花香り 恋の七夕 夢のよう」

aさんの作品は「夏のバレンタインデー」を作品化した。bさんは「織物」と「織姫」の頭韻を踏んだ、技巧的な作品に仕上げた。cさんは中国の民間伝説である「七夕の夜に葡萄棚の下にいと牽牛織女の内緒話が聞こえる」に基づいた作品になっている。



写真③：短冊に清書

「七夕」で特筆すべきは、俳句を中国語に翻訳した留学生が登場したことである。周知の通り、俳句の中国語訳は「漢俳」と呼ばれ、元来は様々なスタイルで訳されていたが、近年は「五七五」に収斂しているようである⁽¹⁾。しかし、留学生たちは「漢俳」の存在は知らないし、教員側から「中国語に訳しなさい」と指示を出したのではないにもかかわらず、自主的に翻訳をした。aさんは日本語と字数を合わせたものを、dさんは字数にとらわれずに意識を、

cさんは下敷きになっている中国民話を説明的に挿入して訳した。

さらに、「七夕や」のように切れ字を用いた作品ができたり、写真③のように学園祭を意識して短冊に書いたりして俳句の世界にだいぶ慣れてきたように見受けられた。

3. 「表現文化大賞」入賞

今回試みた俳句制作は一年間を通して実践する予定であるが、前期末に嬉しい出来事があった。

本稿2.2で挙げたaさんの「薄暑来て 大仏 そびえ 古都らしく」が本学短期大学部表現文化学科主催「第4回 表現文化大賞」優秀賞に選ばれ、表彰されたのである。(写真④の一番左の学生) aさんは北京語言大学からの交換留学生ということもあり、学長を始め教職員皆がうれしいことであった。作文にもあるように鎌倉大仏が印象に残り、天気の良い5月で夏を思わせる日であったこ



写真④：表現文化大賞受賞

と、事前に鎌倉時代を学習していたことがこの句になった。当初は「鎌倉に 大仏そびえ 古都らしく」だったが、季語がないことと「鎌倉」「大仏」が重複していることから歳時記を調べ「薄暑」を得た。aさんは7月に実施された日本語能力検定試験でも1級に合格し、日本語力向上が検証された。

結び

今回の俳句を教材として日本語能力の向上を目指した授業について、受講生にインタビューをした結果、以下の回答を得た。

問) 今まで俳句を学んだ経験はありますか？

答) ・まったくありません。

・留学生別科の授業で一回だけ学んだ事がありました。(ちょうど半々)

問) 実際に俳句を作ってみて、どう感じましたか？ 簡単でしたか、難しかったですか？

答) ・簡単でした。

- ・テーマによって作りやすいにくいがありました。八重桜が作りやすかったです。
- ・難しいと感じました。特に、自分の気持ちをまとめるのが難しかったです。
- ・私の国には四季がないので、季語が分かりにくかったです。(ベトナム南部出身)
- ・八重桜は難しかったけれど、だんだん慣れました。
- ・良い句は作れないけれど長く考えて作れました。

問) 五七五のリズムはどうですか？

答) ・問題ないです。(多数)

・ちょっと慣れるまで難しかったです。

問) 俳句制作を通して、どんな点が向上したと思いますか？

答) ・季語を習って、四季を意識するようになりました。

- ・五七五に言葉をまとめる力がつきました。
- ・短い日本語で自分の気持ちを表すことができるようになりました。

以上のことから、次の点が明らかになった。

- ・四季の事象に対して観察眼が育った。
- ・季節に敏感になった。特に中国の北方では梅雨がないので、このゼミを通じて梅雨を知り日本の四季を体得した。
- ・俳句の五七五リズムに慣れてきた。当初は長音や促音・拗音の数え方が分かりづらい様子が見えたが、徐々に指折り数えて作るようになった。
- ・同じ体験の中に自分の感性を磨く姿勢が見えた。

- ・俳句を作ることを前提に取材を行っていた。
- ・自分たちが作った俳句を中国語版にも入れて発信したいという積極性が出てきた。
- ・「どのように中国語に訳すのか」を自分なりに考え、実践した。
- ・日本文化理解のために実践した結果、日本語表現の能力向上がみられた。

留学生は外国語である日本語を用いて自分の感情を表現することに慣れ、愛着を持つようになった。すなわち、「俳句を学んで制作する」という目標を課したことによって、日本語とその背景にある日本文化・日本の特徴を深く観察し、最終的に作品化することができるようになった。このことは大きな成長であり、今後は季語をより理解することにより、独自性のある作品が多く生まれるのではないかと期待している。

本ゼミ履修者である留学生の上記の感想は、ゼミに吟行（学外授業）を伴う俳句づくりを導入した教員側の試み（俳句を用いて留学生の日本語表現を豊かにする）が奏功し、教員が今後の授業内容をより今後、より一層発展させる方向性を示唆したといえる。

かねて十文字学園女子大学留学生別科においては、芭蕉はもとより国際俳句にも造詣が深い本学の東聖子教授より俳句の特別講義を受けてきた蓄積がある。別科生のかなりの数が本学学部に進学する傾向を考えた時、学外授業も伴う俳句制作とその鑑賞は、「別科」と「学部」を貫いて留学生の情操を養い「日本語能力向上を伴う日本文化理解」に資する有力なツールとして位置付けてよいのでないか。

加えてその作品を北原俊一の指導を受けながらWEBのコンテンツとして写真（留学生による撮影と採用する写真のキャプション制作を伴う）も配したビジュアルな発信作業は、日本語能力の向上をさらに伸ばし、とりわけメディアコミュニケーション学科の学生に求められる総合的な「編集力」を育んでいくであろう。教員側に求められる一層の指導上の努力の必要性を、俳句作りにいそしむ留学生たちの目の輝きと推敲の真剣さから感じ取った6カ月であった。

こうした認識のもと、私たち教員側は後期ゼミにおいても引き続き俳句学習と制作を続け、本学ホームページ「Colorful東京圏！ 十文字学園女子大学発」にアップしていく予定である。特に、吟行を伴う学外授業を含めて留学生のみならず日本人学生の参画による俳句制作・鑑賞により、留学生と日本人学生との意見交換を密にし、異文化を理解しあう面白さを通して国際交流の成果を期す考えである。

また、本学学園祭である桐華祭において俳句展示とともに来場者との「俳句ライブ」を計画しており、留学生目線の作品が日本人学生や来場者にどのように受け止められるのか、その反応を考察したい。

今回の俳句制作に当たって石野榮一が数点教材を作成した。今後もこれらの教材を用いつつ、留学生が躓きやすい点をうまくフォローできるように改良を重ねたい。

なお、池間里代子は本稿に関連する口頭発表を「留学生ゼミにおける日本語教育の試み」と題して2014年5月18日、上海同济大学において行われた日本語教育学会全国大会にて行なった。

本稿はその続編である。

注

- (1) 愛知大学中日大辞典編纂処 1968年『中日大辞典』大修館書店 p. 730にみえる例を挙げると：古池や蛙飛び込む水の音（芭蕉）は「幽幽古池畔，青蛙挑破镜中天，丁冬一声喧」の如く訳されるが、字数にこだわらず「古池一青蛙跳进水里的声音」の如く訳すものもある。なお、「漢俳」という言葉は「1980年5月30日のことで、その中に日中友好協会は初めて大野林火先生を団長とする『日本俳人協会訪中団』の来訪を迎えた。（中略）趙樸初先生は興味津々で、日本俳句の17音（575）の形を借り、伝統的な漢詩の作り方によって、即席で三種の詩を賦した。これが中国詩歌史上における最初の漢俳であり、（中略）それを嚆矢として、漢俳は北京から中国各地にひろまってきた。」（東2012：33）とのことである。

参考文献

- 公文公監修『KUMON俳句カード』春夏秋冬 1985年 くもん出版
 三浦和尚・夏井いつき編著『俳句の授業ができる本』2011年 三省堂
 東聖子・藤原マリ子編『国際歳時記における比較研究―浮遊する四季のことば』2012年 笠間書院
 宇多喜代子監修『親子で学ぶはじめての俳句』2014年 NHK出版
 林岫主编『中国汉俳百家诗选』2013年 线装书局